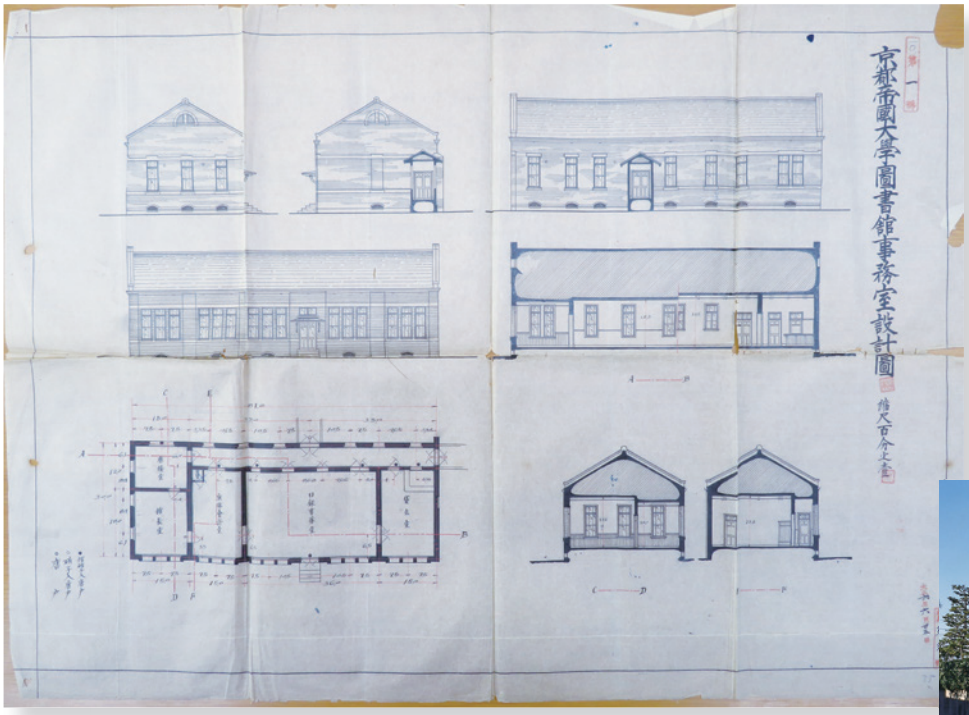
2021.10.31／Vol.41

京都大学
大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter　第41号

目次

『京都大学建築学１００年の歩み』に執筆して
－ 20 世紀知識人としての西山夘三－
広原　盛明 …… 2
京大と大典記念京都植物園
―理学部附属気象学特別研究所の設置をめぐって―
川口　朋子 …… 4
日誌 …… 6
大学文書館の動き： …… 7
企画展「京大図書館の起源
―知の集積地として―」を開催します。
人の動き …… 7
創立期の職員たち
西山　伸 …… 8



京都帝国大学図書館事務室設計図
（京都大学施設部所蔵）

1918 年 3 月、附属図書館開館以来の懸案であった図書館事務室が竣工した。山本治兵衛・永瀬狂三の設計で、館長室・目録事務室などが設けられた。三代目館長新村出は、館長室に常駐し、研究や図書館運営に従事したという。東大路通に面した赤煉瓦造の建物は、1948 年に事務室が新館に移った後も、総合博物館（2001 年竣工）建設のために取り壊されるまで、保健診療所、教育学部倉庫として使用された。右下の写真は 1990 年代半ばのもの（関連記事 7 頁）。

『京都大学建築学 100 年の歩み』に執筆して
― 20 世紀知識人としての西山夘三―

京都府立大学元学長（1961 年京都大学工学部建築学科卒）　広原 盛明

京都大学建築学科は、1920（大正 9）年 8 月 18 日、京都帝国大学工学部の土木工学科、機械工学科、電気工学科、採鉱冶金学科、工業化学科に次ぐ 6 番目の学科として創立された。1955 年の創立 35 周年以来、5 年ごとに京大建築会（同窓会）総会が開かれることになり、60 周年記念事業として『京都大学工学部建築学教室六十年史』（440 頁、1980 年）が刊行された。今回の『京都大学建築学 100 年の歩み』（427 頁、2021 年）は、それに次ぐ本格的な記念出版事業である。

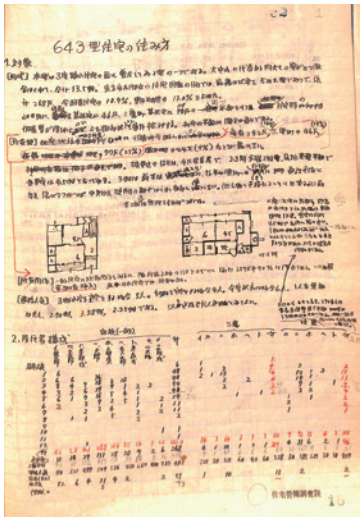
六十年史と「100 年の歩み」の違い

六十年史は、学科創立と沿革に関する「総論」、学科講座と附置研究所研究部門の紹介と解説からなる「各論」、そして創立時から戦中・戦後に至る教室の様子や学生生活などを語る座談会「建築学教室の横顔」から構成されている。通常、学部学科の正史は、厳密な歴史的考証に裏打ちされた論考で埋められるものと相場が決まっているが、六十年史は座談会の占める分量（190 頁）が総論と各論を合わせた分量（180 頁）よりも多いという異例の編集であり、しかもその座談会の内容がとてつもなく面白いのである。「横顔」で教室の歴史を語らせるというやり方は、自由闊達な建築学教室の気風を反映していると言えるが、こんなお手本を前にした「100 年の歩み」の編集メンバーは途方に暮れたのではないか。

「100 年の歩み」の方は、おそらく六十年史後の世紀を跨ぐ激動の 40 年間をどう語るかということが話題になったはずである。しかし、この世紀的変動を的確に捉えて書くことはかなり難しい。この点、編集者が「変動の履歴について拙速に評価を固定せず、事実関係の記録を整備することにした」のは賢明だった。代わりに採用されたのは、建築学教室創立の次世代教授 16 人の「素顔」を身近にいた関係者に語らせるという方法である。「六十年史の後の 40 年、創立からの 100 年。100 年という長きにわたる時間は、多様な観点を許容するべきだろう」との方針は、一見あやふやな印象を与えるが、現代の流動的な歴史状況を読み解くうえでは的を射ていると言えるのかもしれない。

西山夘三教授のこと

西山夘三（敬称略）は、建築学科建築計画講座教授の三代目に当たる。プロフェッサー・アーキテクトと言われた武田五一（初代）、森田慶一（二代目）の後を引き継いだ西山は、三代目にして建築計画学の新たな理論を切り開き、「生活空間計画学」の基礎を築いた。庶民住宅の研究を通して住宅の「型計画」理論を確立し、「食寝分離論」を始めとする住宅計画、住宅供給計画の理論的基礎を確立したのである。その成果は、戦後日本のモダンライフのシンボルとなった団地住宅の「ダイニングキッチン」として実現した。太平洋戦争で焦土化した日本の国土と住宅の復興に一貫して取り組み、20 世紀を通してすまい・まちづくりの研究に生涯を捧げた西山の功績には多大なものがある。



論文「632 型及び 642 型住宅の住み方」（1932）の原型となった草案。後に「食寝分離論」に結実する。

西山は優れた文筆家でもあった。西山の存在を世に知らしめた戦後最初の著作に、『新建築』復刊第 1 号（1946 年 1 月）及び復刊第 3.4 合併号（1946 年 6 月）の全頁を飾った「新日本の住宅建設」と「新しき国土建設」の 2 論文がある。これをもとに書き下ろした『これからのすまい―住様式の話―』（相模書房 1947 年）は毎日出版文化賞を受賞し、また生涯の住生活の変遷を描いた『住み方の記』（文藝春秋 1965 年）は日本エッセイストクラ

ブ賞を受賞した。この他、岩波新書のベストセラーになった『日本の住宅問題』(1952 年)、『現代の建築』(1956 年) など、社会に向かって研究成果を絶えず発信し続けた西山の意欲と努力は目を見張るものがある。

私は、西山研究室のゼミ生・大学院生(1960 ～ 65 年) として教えを受け、その後助手・講師 (1965 ～ 71 年) として 12 年間の大学生活をともに過ごした。西山の印象を一言でいえば、軸足のしっかりした研究者であり、多彩な社会活動を展開したアクティブな知識人だということである。学生の教育にはあまり熱心ではなかったが(西山の指導方法は「捨て育ち」「放し飼い」などと言われていた)、研究者としては足元にも近づけないほどの存在感があった。

西山の業績は、「NPO 法人西山夘三記念すまい・まちづくり文庫」(関西文化学術研究都市、積水ハウス総合住宅研究所内) に全て整理して保存され、閲覧可能となっている。整理作業に当たった門下生たちは、その膨大な研究ストックに目を奪われかつ圧倒された。「背中で教える」タイプだった西山は、没後もなお門下生の前に大きく立ちはだかっているのである。

「京都計画 1964」の模型
西山は生活空間の荒廃化を批判し、「京都計画 1964」を提案した。写真は、ゼミ生と検討している様子。

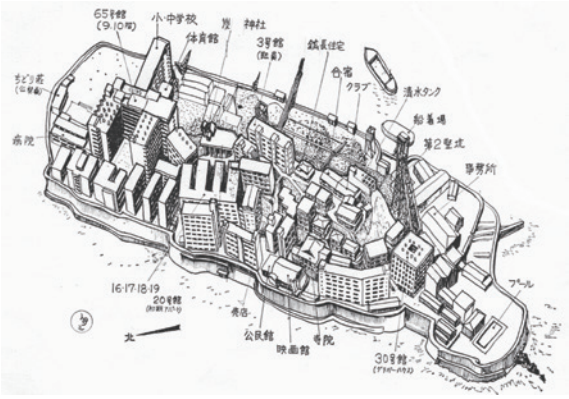
西山の戦後史

100 年史への寄稿「教育者・大学人としての西山夘三」では、西山の戦後史を「戦後復興期」「高度成長期」「国土再編期」の 3 期に分け、それぞれの時期における代表的な著作の特徴とその背景を解説することで全体像を描いた。この時期区分は奇しくも西山の履歴と重なっており、戦後復興期は終戦直後から 1950 年代にかけての「助教授時代」、高度成長期は 1960 年代から定年退職 (1974 年) までの「教授時代」、そして国土再編期は定年から没するまで (1994 年) の「名誉教授時代」にほぼ相応する。

(1) 戦後復興期を代表する著作は、1948 年に毎日出版文化賞を受賞した『これからのすまい』である。上記の『新建築』2 論文をそのまま単行本にして出版してはどうかとの提案を受けた時、西山は建築家の専門書とするのではなく、一般読者向けの啓発書として書き下ろしたと述べている。それは、西山が常に国民と向き合う姿勢を保ち、戦後の住宅問題研究を単なる研究テーマとしてではなく、国民の「住様式＝住まい方」の変革の課題として捉えていたからであろう。

(2) 高度成長期においては、「21 世紀の日本に関する国土と国民生活の未来像の設計」(総理府主催コンペ、1968 ～ 70 年) が大きな課題となった。総理府の応募要領には、「政府は、明治百年を迎える機会に今後における日本の進路の拠りどころともなる 21 世紀初頭の国土と国民生活のあり方について、その具体的計画を募集する」とあった。西山は、50 を超える専門分野の研究者約 190 人が参加する大規模な学際的共同研究を組織してこの課題に取り組み、成果を「21 世紀に向かう国土と都市の設計」を構想計画として総理府に提出した。

(3) 第 1 次オイルショックを契機にして高度成長期が終焉し、日本国土はそれ以降、「人間居住環境の整備」や「地方定住」をテーマとする国土再編期へと移行していく。西山は定年後、自叙伝などの執筆活動を本格化させる一方、住民のまちづくり支援にもエネルギーを注いだ。西山は多忙な社会活動の傍ら、定年後の自由時間を利用して 20 世紀を通しての自分の人生を振り返り、すまい・まちづくり研究者の視点から研究生活を歴史的・客観的に描き出そうとしたのである。言い換えるなら、西山は全生涯を通して「20 世紀 (同時代史) を描こう」としたのだといえよう。



軍艦島鳥瞰図 (西山のスケッチ)
西山は 1952 年と 1970 年に長崎県の端島炭鉱の住み方調査を実施した。稼働中の島内を踏査し、カメラに収めた。

京大と大典記念京都植物園
—理学部附属気象学特別研究所の設置をめぐって—

京都大学大学文書館助教　川口 朋子

はじめに

1923（大正 12）年 11 月、京都下鴨に三井家からの寄附で整備された大典記念京都植物園（現在の京都府立植物園）が開園した。京大は、京都植物園が計画段階であった 1910 年代から大学の教育や研究に京都植物園の土地を活用することを検討していた。分科大学や附属施設の充実を目指す大学にとって、大学近場にある広大な公有地は魅力的に映ったのだろう。京大は園地に関する大学の要望を何度か京都府へ伝え交渉するが、その結果 1926 年 3 月に園内の一部土地を借用する形で設置されたのが理学部附属気象学特別研究所である（図 1）。

図 1　開園当時の大典記念京都植物園（「園案内」『大典記念京都植物園一件』京都府立京都学・歴彩館所蔵）
左上の白地部分が、京大が理学部附属気象学特別研究所設置のため京都府から借用した土地。現在は京都府土木事務所が所在。

1．設置場所をめぐる交渉

気象学特別研究所は、農作物や植物の生育、進化、遺伝に関する研究費を寄附したいという近江の豪商塚本源三郎の申し出を受けて 1917 年 12 月に評議会で設置が決定された（『評議会議事録』大学文書館所蔵、識別番号 MP00002）。荒木寅三郎総長は当時整備中であった京都植物園の敷地内に研究所を設置しようと考え、京都府と交渉を開始する。その際、京大は気象学特別研究所と府の農事試験場、府立農林学校（現在の京都府立大学）が研究面で連携することを京都府へ提案した。さらに植物園を訪れた一般の観覧者のために研究室を公開し、普通教育に寄与する構想も示した。

当時の木内重四郎知事は、府内に分散していた農事試験場を下鴨に移転させ京都植物園、府立農林学校と一体的に運用する構想を描いていた。そのため京大の構想は知事の大いに歓迎するところとなり、京都府の全面的支援を得る。京大は研究所建設のため植物園の敷地約 2500 坪を借用し、京都府に下賜されていた大正大礼の建築物も利用できることとなった。ただ、これらはあくまで非公式の段階での交渉であり、その後木内知事が汚職疑惑事件で辞任すると京都府との交渉は途絶えてしまった。

2．公式な交渉開始

1918 年に馬淵鋭太郎知事が就任すると翌年、京都府との公式協議が開かれ、園地の北西隅 1500 坪を京大が無料で使用することが決定した。当初の 2500 坪から 1500 坪に敷地が減少したため、気象観測や試験用の植物栽培に必要な通風、日照等の条件を満たせないと判断した京大は、露場と栽培所を兼用するなど一部設計を変更している。さらに土地借用の条件として、敷地内の官舎建設及び研究所内の関係吏員職員の常駐は認められなくなった（『気象学特別研究所関係』大学文書館所蔵、識別番号 01A09203）。

3. 協定の締結

1919 年に京大に農学部を設置することが決定すると、荒木総長は整備中の京都植物園予定地を農学部附属農場として使いたいと、馬淵知事へ申し入れた。知事に断られると、元総長で文相経験者でもある岡田良平に尽力を頼み、荒木は 1920 年春、京都植物園の寄附者である三井家に面会し附属農場としての使用を願い出た。

他方、京都植物園の整備工事は第一次世界大戦後のインフレの煽りを受けて大幅に遅れていた。工事費用が底をつくと、京都府は二度目の寄附を 1920 年秋に三井家に申し入れた。こうして、三井家へは大学と京都府それぞれの要望が寄せられることとなった。三井家は京都府からの追加寄附の要望を受け入れるとともに、京大に対しては附属農場として使用することは認めない代わりに学術研究及び実習のための便宜を図った。このように三井家が京都府と京大の双方の要望を仲介する形で、1921 年に協定が成立した。

協定は、「一、御大典記念植物園ハ事情ノ許ス限リ京都帝国大学ノ学術研究及実習ノ便宜ニ供スルコト　一、府知事ハ植物園長及評議員数名ノ推薦ヲ京都帝国大学総長ニ依頼スベキ場合ハ総長ハ之ニ応セラレタキコト」(前掲『評議会議事録』) というもので、京大と京都植物園の連携関係を公式に決定づけるものとなった。

4. 度重なる計画変更

三井家から二度目の寄附を受け、植物園の整備工事はようやく終了した。1923 年秋に開園の見通しが立つと、研究所の土地の引き渡しも目途が立ち、大学と京都府は研究所の仕様について協議した。このとき京都府からは、研究所の入口は園地外の道路に面すること、研究所の周囲に垣を設けることなど新たな条件が示された（前掲『気象学特別研究所関係』)。京大が用意した図面では研究所から直接、京都植物園内へ通じる通路が見られる（図２)。通路は、植物園を訪れた一般の観覧者が研究所を見学する際に使う出入り口であり、研究所の一般公開実現のために必要なものだった。

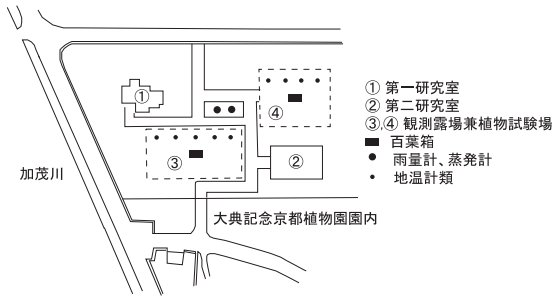


図２ 京大が用意した気象学特別研究所建物配置図案（「気象学特別研究所配置図説明」『大典記念京都植物園一件』よりトレース作成）

京大は、京都府が示した条件は当初掲げた研究所の方針と相容れず受け入れ難いとし、今までの交渉経緯を改めて京都府へ説明し、条件の見直しを求めた。1924 年に池田宏知事が就任すると、荒木総長は植物園と研究所の関係に特別の配慮を願い出る書簡を送っている（『大典記念京都植物園一件』京都府立京都学・歴彩館所蔵)。

それでも大学の希望は認められず、京大は再び研究所の仕様を変更せざるを得なかった。なお、このとき京都府側は研究所の敷地を有料で貸し出す案も検討していたが、1921 年の京大との協定内容を考慮し無償で貸し付けることが京都府参事会で決定されている。

おわりに

1925 年 12 月、京大は京都植物園の北西隅 1500 坪の土地を気象学特別研究所の設置のために借用するという誓約書を京都府へ提出し、ここに正式に起工が了承された。こうして気象学特別研究所は、気象学講座の附属施設として翌年 3 月に開設し、1980（昭和 55) 年 3 月に花山天文台に統合されるまで植物園内で研究活動を行った。

[日誌](2021年4月～2021年9月)

2021 年

4/ 2 西山教授、新採用職員研修において「京都大学の歴史」を講義。

4/ 6 村上良平氏より、写真「京都帝国大学化学教室火災復旧工事竣工記念」・「通信博物館、講演会場」を寄贈。

4/ 9 学内より、地域講演会(平成23年度、25年度)について照会。

4/14 山口情報芸術センターより、展覧会「ヴォイス・オブ・ヴォイド」につき、写真利用の照会。

4/19 大学文書館教員会議。

4/21 学外より、1944 年度文部省人文科学研究について照会。

4/22 岡田靖子氏より、御尊父の三高時代（1916 年以降）の写真を寄贈。

4/24 NHK より、戦争関連資料の所蔵・展示状況について照会。「戦争関連資料アンケート調査」に回答。

4/26 関西テレビより、ニュース番組「報道ランナー」内での京大農場（高槻）写真の利用について照会。

4/27 京都大学総合博物館より、企画展「医師になる！京都大学の医学教育」のための写真利用について照会。

4/27 基礎物理学研究所図書室より、企画展「湯川秀樹と読書―ノーベル賞物理学者の原点―」のための写真利用について照会。

4/30 学外より、1942 年京大文学部入試の志願者について照会。

4/30 『京都大学大学文書館だより』第 40 号刊行。

5/12 NHK より、大学文書館所蔵の戦時期の日記について照会。

5/12 学外より、西田幾多郎の写真の利用について照会。

5/18 松本均関係資料を公開。

5/20 前田陽氏より、堀内三郎名誉教授の所蔵資料寄贈。

5/24 大学文書館教員会議。

5/26 NHK より、原爆展関係資料について照会。

5/26 学外より、元生覚太郎(1913年理工科大学卒)について照会。

5/30 産経新聞社より、鹿屋海軍航空隊所属の隊員が京大関係者か照会。

6/ 3 京都大学国際交流課国際企画掛より、京都大学設立当初の写真の利用について照会。

6/21 学外より、高田保馬関係資料について照会。

6/28 大学文書館教員会議。

6/29 学外より、昭和 18 年度月曜講義「大東亜建設ノ理念」について照会。

7/13 総合博物館企画展「医師になる！～京都大学の医学教育～」（2021 年 7 月 21 日～ 10 月 10 日開催）のために資料 3 点を貸し出し。

7/14 朝日新聞社より、時岡鶴夫関係資料について取材。

7/26 大学文書館教員会議。

7/28 小林久美子氏より、山田英夫関係資料を寄贈。

7/28 日野恵子氏より、日野龍夫氏書簡を寄贈。

7/30 産経新聞より、企画展「京大の 80's」について取材。

8/ 2 毎日新聞より、企画展「京大の 80's」について取材。

8/ 2 （株）Echelle-1 より、書籍『モダン建築の京都 100』への写真掲載の照会。

8/ 3 事務本部、各部局からの文書移送作業が完了。

8/ 3 NATIONAL INSTITUTE OF CARPOLOGY（モスクワ）より、植物学者鈴木靖について照会。

8/ 3 企画展「京大の 80's」開催（～ 10 月 31 日）。

8/ 4 学内より、広報誌『紅萌』への写真掲載について照会。

8/13 学外より、京大工学部に入学した最初の女子学生の入学年について照会。

8/16 大学一斉夏季休業のため 8 月 18 日まで休館。

8/19 株式会社 140B より、大阪舎密局跡のくすのきの管理と三高同窓会の関係について照会。

8/20 学外より、作田荘一の履歴について照会。

8/20 毎日新聞大阪本社より、京都大学原爆災害総合研究調査班について照会。

8/30 連載コラム『中村貞夫とその芸術』に使用する写真について照会。

9/ 2 学外より、奥村伊久良（1927 年文学部卒）の応召後の経歴について照会。

9/ 2 漱石山房記念館より、「令和 3 年度　漱石山房記念館　《特別展》「永遠の弟子　森田草平」展」の展示パネルと展示図録に大学文書館所蔵写真「藤井乙男（文）」を掲載することについて照会。

9/ 6 大学文書館教員会議。

9/13 西山、文書作成能力研修において、「なぜ文書を作る？-公文書管理法と私たち-」と題して講義（於：百周年時計台記念館 2 階　国際交流ホール Ⅰ）。

9/18 西山、山口県教育庁主催「やまぐちで学ぶ！高校教育魅力向上事業」ニューフロンティアセミナーにおいて「大学とは何か？　－近代日本の歴史からみる－」と題して講義（オンライン）。

9/19 オーストラリアより、1920 年前後に京大を卒業した医師の調べ方や日本に留学したオーストラリア人医師が京大の卒業生であるかについて照会。

9/28 樹林舎より、12 月刊行の『宇治市の昭和』に使用する写真掲載の照会。

大学文書館の動き

企画展「京大図書館の起源 ―知の集積地として―」を開催します。

大学文書館では、2021 年 11 月 2 日（火）から企画展「京大図書館の起源―知の集積地として―」（2022 年 1 月 16 日（日）まで、百周年時計台記念館 1 階歴史展示室にて）を開催します。本企画展では、京都帝国大学附属図書館の設立から戦前期を通じての図書館の歴史をふりかえります。附属図書館は、京都帝国大学の研究と勉学を支える機関として構想されました。1899 年に閲覧が開始されて以来、草創期の附属図書館は新刊図書のみならず古書籍や文化財を収集し、発展を遂げていきます。

図書館設立に理念を持って取り組んだのが、初代総長の木下広次です。木下は図書館学者田中稲城の帝国図書館構想を受けて、一般市民にも開かれた京都帝大図書館を構想したとみられます。若手研究者と連携しつつ海外の文献を収集し、学生に図書の利用を呼びかける姿からは、図書館運営に注ぐなみなみならぬ熱意が感じられます。図書館設立後の 1900 年 1 月には、初代図書館長をつとめた島文次郎が関西文庫協会を設立し、図書館人にとって先駆けとなるネットワークを築きました。さらに、広辞苑の編集で知られる新村出も、1911 年から 25 年の長きにわたって三代目館長を務め、図書館の基盤整備に尽力しました。目録作成、個人文庫の設置といった、今日まで引き継がれる図書館実務の礎は、新村によって築かれたといえます。

展示の各コーナーでは、草創期における図書館人の奮闘に目を向けつつ、尊攘堂旧蔵の貴重書コレクションや図書館の設計図面なども展示し、図書館がダイナミックに生成してきた軌跡をたどります。

読書の秋に、書物や図書館の持つ意義を今一度考えるきっかけとしていただければと思います。たくさんの方々の御来場をお待ちしております。

尊攘堂（左）と附属図書館（初代）（中央）

附属図書館書庫

人の動き（2021 年 4 月～ 9 月）

2021 年 4 月 1 日　　渡辺恭彦、大学文書館助教に着任。

創立期の職員たち

京都大学大学文書館教授　西山　伸

すぐれたものが数多刊行されている日本の大学沿革史において、弱点の一つは事務職員の歴史についての記述が薄いことではないか、とかねてから思っている。その具体的なありようを語る資料が極端に少ないことが理由であろう。

ただ、京都帝国大学にどんな種類の職員が何人いたかということならば、毎年文部省に報告されているので、大学文書館所蔵の資料からある程度跡づけられる。ここでは、創立から10年経った1907年度の職員について見てみよう（数値は『文部省学事年報資料　自明治三十年至明治四十年』識別番号MP00264、〈以下「学事年報」と表記〉によった）。

学事年報には「教官及事務官表」があり、それを本部および各分科大学（現在の学部）別に表にしてみた（当時医科大学は京都と福岡にあったが、ここでは京都のみを示した。また、文科大学はこの前年に置かれたばかりなので、人数は少ない）。一目見て事務官の少なさに気づかされる。ここで数え上げられているのは、「京都帝国大学官制」などの法令で置くことが定められている職員で、いわば国家の官吏であった。ちなみに事務官には、総長、庶務会計を担当する書記官および書記、学生を担当する学生監、施設を担当する技師などの職があった。

	教　官			事務官
	教授	助教授	助手	
本部	0	0	0	18
法科大学	18	5	0	2
医科大学	21	10	43	5
文科大学	7	5	1	1
理工科大学	25	12	12	2
教官計	71	32	56	28
合計	159			

もちろん、このほかに多数の職員がいた。それは学事年報に「雇員及傭人表」としてまとめられている。本部および各分科大学別の人数を紹介すると、本部77、法科7、医科369、文科7、理工科66の合計526名に上っている。

実は、学事年報には職種ごとの給与額も記載されているが、「教官及事務官表」では「俸給年額」であるのに対して、「雇員及傭人表」では「月俸額」となっている。前者が年単位の雇用を基本にした正規の職員で、後者が月単位の「非常勤職員」ということになろう。

その「雇員及傭人」にはどのような職種があったのだろうか（職名は当時の資料によっている、念のため）。本部および各分科大学におおむね共通して置かれていたのは、事務雇、教務雇、給仕、小使といったところであり、理工科大学には職工、本部と医科大学には巡視がいた。圧倒的多数が置かれていた医科大学では、看護婦132名、看護婦見習31名が目立つほか、調剤手、按摩手、洗濯職、洗濯婦、雑仕婦など、他の分科大学にはない職種が多い。一方給与額については、事務雇や教務雇は月額12円前後であったが、これは高い方で、看護婦や小使は平均で月8円あまり、給仕は月4円ほどであった。高等文官試験に合格したエリート官吏の初任給が月50円だった（『岩波日本史辞典』1765頁）時代のことである。学内でも、総長は年額4000円、最も高い教授で年額2300円程度であったので、相当な「格差」であったといえる。もう一つ付け加えると、医科大学の看護婦、看護婦見習、雑仕婦、洗濯婦、給仕以外女性はほぼいなかった。当時の京大（医科大学以外）は、女子学生がいなかったことも合わせて、全くの男性社会であった。

「雇員及傭人」の具体的職務については、巡視など学内規則が存在している職種も一部あるが、詳細は不明である。しかし、こうした人たちによって当時の大学が支えられていたことは間違いない。

京都大学大学文書館だより　第41号　2021年10月31日　京都大学大学文書館発行
〒606-8305　京都市左京区吉田河原町15-9　Tel.075-753-2651　Fax.075-753-2025
Email: archives@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp　http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/